

【特集：廣野喜幸先生ご退職記念】

暗夜の灯 — 研究者・指導者としての廣野先生 —

花岡 龍毅¹

東大駒場校舎にある廣野先生の研究室に初めてお伺いしたのは、2007年の年明けだった。キャンパス内には、何日か前に降った雪が残っていたように思う。日記をみると、2月9日（金曜日）とある。もう18年も前のことになる。お伺いしたのは、研究生として、先生のもとでご指導をいただくにあたっての面接を受けるためであった。

私は、当時勤めていた京都大学医学部の任期が、その年の3月をもって満了となるので、その後は、医学の基礎研究者をやめて、科学史・科学論の研究者へと転身をはかろうと決意していた。もともと哲学出身の私は、哲学的な関心から基礎医学の研究へと転身したが、いずれは実験研究をやめて、最終的には、科学をめぐる哲学的な問題を研究したいと考えていた。すでに40歳を過ぎていた私にとって、転身のための最後のチャンスと思われた。

ご指導をいただく先生として、科学者であると同時に科学論の研究者でもいらっしゃるような方を考えていた。私は、様々な科学史・科学論分野の研究者のお仕事やご経歴を調べていく中で、廣野先生の存在を知り、ご指導いただくならこの方しかいないと思い、一面識もない先生のもとへ、研究生としてご指導を仰ぎたい旨を記したメールを、私の業績を添付してお送りした。よくよく考えてみると、まったく非常識なことであった。今でも冷や汗の出る思いがする。

しかし、私のメールをお読みになった先生は、すぐに丁寧なご返事下さり、私の希望を快諾してくださった。この時の先生のご寛大さには、今でも頭の下がる思いがする。仮に今、まったく見知らぬ人物が、研究生として私のもとで研究したいという希望をもってコンタクトをしてきたとしても、とても受け入れる気にはなれないと思う。そもそも、返事すらしないかもしれない。研究に

¹ 常磐大学人間科学部教授。

加えて日々の講義や校務、ゼミ生の個別指導、等々という激務のなか、知人の紹介もない人物を、受け入れて指導しなければならない理由が思いあたらないからである。

先生の研究室のメンバーの方々も、私を暖かく迎え入れてくださった。当時の研究室のメンバーは、田中丹史さん、サイジラホさん、住田朋久さん、田野尻哲郎さん、関谷翔さんで、みな大学院生であった。みなさんの、とても明るく、のびのびとしたご様子から、日頃の先生の研究指導がどのようなものか、すぐに感じ取ることができた。

ここで、先生の研究指導の特徴を述べてみたい。まずその最大の特徴は、学生の自主性を大切にされる点にある。学生には、最大限の研究の自由が許されており、研究テーマの選定や方法論、そのほかすべてに関して、先生は決してご自分の考えを押し付けたりなさらない。先生が、学生の研究に対してアドバイスや批判をされるのは、ある程度研究が進み、その成果をご覧になれるときである。そのアドバイスは常に的確で、批判は鋭く射ているばかりでなく建設的で、学生の研究の質を飛躍的に高める性格のものである。

しかし、こうした学生に研究の自由をお認めになる先生の指導方法は、学生を甘やかすということではまったくなく、むしろ、自由を許されることで、学生は、かえって厳しい試練を経験することになるのである。実は、自由にテーマや方法を選んで研究を進めていくことほど辛く厳しいことは無い。すべてを自分の責任として担いながら、前進していくしかないからである。その意味で、先生のご指導は、学生を、プロの研究者として独立して研究ができるようにするための、とても厳しい訓練なのである。

先生のご指導のもう一つの特徴は、学生の研究や意見の中に、必ず何か良い点を見つけて褒めて、学生の長所を伸ばしてくださる所にある。先生は、授業やゼミナールの際に、学生の研究や報告のなかから、必ず評価すべき点を見つけて、褒めてくださる。また、出席者1人1人を指名されて、発言を促し、それぞれの発言の中から、必ず何かしらの良い点を指摘して議論の中に組み入れて、議論を発展させるばかりでなく、そのことで、出席者が自信をもって発言し、議論しやすい雰囲気をつくれるのである。

私は当時、新しい研究分野に足を踏み入れて、将来の見通しの立たない不安の中にいたが、先生は、私の拙い研究や意見のなかに、必ず何か良い点を指摘してくださり、お褒めの言葉をくださった。このことが、とても大きな心の支えになった。今になって振り返ってみると、当時の私の研究にせよ発言にせよ、取り立てて評価していただけるような点は何もなかったのであるが、先生は私を鼓舞し励ますために、あえて褒めてくださっていたのだと思う。褒めて伸ばす。私は、これこそ学生の能力を開花させるための最上の方法だということを、先生から学ばせていただいた。

最後に、先生のご研究について触れさせていただきたい。優れた指導は、優れた研究と不可分であると考えられる。私は、科学史・科学論へと転身して以来、常に先生のご研究をお手本にしてきた。研究テーマの選択から方法、論文の構成や文体に至るまで、必死に真似てきたのである。科学史・科学論を研究しようと考えた私ではあったが、当時、自分が模範とすべき研究も分からず、何をどう研究すべきかもわからず、途方に暮れていた。そのような私にとっての暗夜の灯が、先生のご研究だった。私は先生のご著書はすべて読ませていただいた。以前に出版された比較的古い論文も、駒場の図書館で探して夢中になって読ませていただいた。文体まで真似ようとして、重要と思われる箇所はひたすら書き写して自分のものにしようとした。そして、私のような初心者でも真似できそうなことがないか、必死に探そうと努めたのである。

私の研究テーマはいくたの変遷を遂げ、はじめ、生殖補助技術の歴史をテーマとし、つづいて、薬害研究へと移り、さらに生政治・生権力論、生・資本研究へと移っていったが、こうしたことはみな、先生の影響である。先に、先生のご研究を真似てきたと書いたが、実を言えば、とても真似るどころではない。ただ真似ようと悪あがきをしているだけである。しかし、研究者にとって、真似たいと思う模範があることは、とても幸福なことだと思う。

先生は、常に新しい研究を手掛け、専門分野を拡げておられる。私が努力を重ねて、少しは先生に追いついたかと思うと、その時には、すでに先生は、さらに新しい分野を開拓されて、はるか先に進んでおられる。ウサギと亀の関係だから、私が先生に追いつけないのは当然で、仕方がないと思うものの、少

しでも先生との距離が縮められないものかと日々悪戦苦闘している。

先生は、この春、東京大学をご定年になられるとのことであるが、今後さらに新しい分野を開拓されて、どんどん先を行かれるものと思う。理屈の上では、亀がウサギに追いつくことはあり得ないとは百も承知のうえで、それでも、研究者として、これからも先生の後を、必死で追っていきたい。そして、先生が私に与えてくださったご恩に、研究を通じて、少しでも報いることができればと思う。